

決壊、逆流 弱点を直撃

府南部豪雨1週間 市街地浸水

身近な川が決壊し、茶色の濁流が家を直撃する。川から離れた場所では、排水路を逆流した水が家屋を浸した。宇治市の市街地に浸水被害を及ぼした京都府南部豪雨は21日で発生から1週間。大量の水は、さまざまな形で住民を襲っていたことが明らかになった。(本田貴信、富田芳夫)

治水改修追いつかず

中小河川氾濫

14日午前4時15分ごろ、宇治市五ヶ庄北ノ庄の松重悦子さん(70)宅に泥水の流入が始まった。すぐ裏を流れる幅約2.5メートルの弥陀次郎川が氾濫した。4時30分、45分ごろ「ドーン」「バキバキ」。音と同時に濁流の勢いが急に激しくなった。

14日午前4時15分ごろ、宇治市五ヶ庄北ノ庄の松重悦子さん(70)宅に泥水の流入が始まった。すぐ裏を流れる幅約2.5メートルの弥陀次郎川が氾濫した。4時30分、45分ごろ「ドーン」「バキバキ」。音と同時に濁流の勢いが急に激しくなった。

「すり鉢の底」雨流入

排水機能不全

久保町巨椋の笠原安夫さん(61)は自宅前の道路のマンホールが排水路の逆流で浮き、15センチほど冠水したのを見た。間もなく周辺の民家が床に激しくなった。宇治市大



①弥陀次郎川の決壊で浸水した宇治市の住宅地(14日午前9時42分、ヘリから)②周囲より低い場所にある住宅地では、排水路の機能不全で一帯が冠水した(14日午前9時38分、宇治市伊勢田町井尻)

井川となつていて宇治川合流地点から上流約760メートルまでが対象だが、合流地点から550メートルの決壊箇所は未着工だった。工事の完了は現時点で2024年度内の予定だ。

今回、弥陀次郎川をはじめ、戦川や堂ノ川、井川といった市街地を流れる計4本が氾濫した。宇治川など大川川の氾濫ではなく、中小河川から周辺に浸水が広がった。

宇治市は、こうした中小河川の堤防決壊や氾濫による浸水区域を想定し、住民に注意を呼び掛けている。

千拓された巨椋池の面影を残す宇治市木幡の木幡池。3本の川が注ぎ、遊水池の役割があると言われてきた。

午前4時半ごろ、近くの齊藤恭司さん(66)は池の水位が満杯まで50センチほど余裕があるのを確認した。だが、30分後には道路と池の境目がなくなった。

毎秒6リットルの排水能力を持つポンプは、増え続ける雨水の流入に対応できず、周辺の住宅地や道路に浸水が広がった。

国土交通省淀川河川事務所によると、約40年前からポンプの排水量は変わっていない。この間、池周辺にはマンションが林立した。五十川政志副所長は「宅地開発などで地表の保水力が低下し、排水能力が足りていない可能性がある」と話す。1カ月前、池の周辺住民が排水能力の向上を市に要望したばかりだった。

両地区は周囲の宅地や道路より低い場所にある。雨はこの「すり鉢の底」の住宅密集地に流れ込んだ。

市は昨年、大久保町巨椋で4本の排水溝を新設、600

相次いで発表し、警戒を呼び掛けた。

府山城北土木事務所が宇治市で観測した記録では、1時間ごとの雨量は午前3時から午後8時、74ミリ、49ミリ、62ミリと推移した。降り始めの13日午後8時すぎから14日午前6時の総雨量は300ミリを超えた。

雨量ピークは午前3～6時

最も大きな被害の出た宇治市の雨のピークは14日午前3～6時の3時間で、計185ミリに達した。気象庁は、府南部に記録的短時間大雨情報を